

# 1990年農林業センサス農業集落カード利用による 松本市農業の景観描写と地域区分の試み

吉 田 隆 彦

- I. 問題の所在
- II. 近年の松本市農業の概観
- III. 松本市農業の景観描写
- IV. 単純化した指標による松本市農業の全域的把握
- V. 農業の担い手（従事者）の状態
  - V-1 稲作の省力化と兼業農家の増加
  - V-2 農業経営の立地環境による地域区分  
A型・B型・C型・D型各地域
  - V-3 有専従者農家率
- VI. 農業従事者の年齢構成とあとつぎ（後継者）
  - VI-1 A型地域の農業従事者の年齢構成，旧松本村と芳川村
  - VI-2 奈良井川左岸 その1. その2. その3.
  - VI-3 奈良井川右岸 その1. その2.
- VII. 里山辺村と今井村，果樹作地の典型例の比較
- VIII. 農業の担い手に関するまとめと要約

キーワード：農業集落カード，農業景観，農業の地域区分，市街地の膨張，土地利用の競合，農業従事者，農家のあとつぎ。

## I. 問題の所在

1980-90年代の松本市の農業の姿をとらえようとしたものに，市川（1991）および小林（1995）の研究がある。市川は，長野県下の花き生産の発展の人文地理的分析のなかで，メジャーな産地の一つである松本市西部の事例にふれ，小林は同様，水稻作が卓越していた松本市西部に施設園芸が浸透定着していく過程を詳しく分析した。市川は，花き生産が労力配分を通じて水稻作と両立する形で定着したことを指摘，小林も花きを含む園芸が水稻作と両立し併存している様子を詳細に述べている。ここで興味深いのは，稲作がもうだめだからやむなく花や野菜の施設園芸を取り入れたという理解を，市川も小林も，していないことである。小林によれば，農家にとって稲作は基盤整備と機械化が進んでも今なお「価値ある」作物で，田の一隅を占める施設園芸もまた，市場の動向に絶えず注意しながら栽培技術の工夫向上をおこたらない，すればただけの甲斐のある「価値ある」作物なのである。小林は，作物自体の多様性にとらわれずに，一歩踏み込んで，「価値ある」作物作りが農家の行動の背後にあることを指摘した。

もしも，こうした視点で松本市農業の，全体を分析対象としたなら，単純な経済的描写の

限界を克服して、示唆に富む記述が得られると思われる。

筆者は次の二点を軸に松本市農業の姿を描きたい。第一は、松本市が県下第二の規模の都市と都市機能の集積に由来する、市街地の膨張が、農業に土地利用の転換を迫る圧力になっていることである。特定の場所の農業経営にふれる時、これには常に留意しなければならない。第二は、農業経営を特徴づけるさまざまな指標の中で、特に農業の担い手、労働力、の状態でいつも留意したことである。何かある統一された指標で市全体の農業を押えながらでなければ、栽培技術や生活様式の詳しい把握が生きてこないとは、小林がさきの研究で指摘した点であった。

松本市の農業は、とりわけ奈良井川左岸地域では、1969年の東電の安曇ダム建設以来、中信平水利開発事業と、これと一体的に実施された農業構造改善事業から大きな利益を受けてきた。

ところが、同時期、諏訪とならんで指定を受けた内陸新産業都市の中核地にもあたり、大規模な工場団地、流通団地、また住宅団地建設による土地利用変化の圧力も被ってきた。また、総合農協の力が強く、その主導の下で、長野トマトや協同乳業などのアグリビジネス部門が伸長し、加工用トマトでは全国首位の地位を維持、酪農経営も長期間継続してきた。トマトには野菜加工も加わり、松本市の工業で、農業と密接につながる食品加工部門は、近代化した和菓子や味噌等地場産業ともども出荷額で常に高い地位を保ってきている。

農業自体の近代的経営展開の育成強化は、合併した旧村単位さらに旧村農協の連合した松本平農協を単位に促進されてきた。人文地理学では、行政単位が形式的地域として、内容を伴った実質的地域に対比されるのであるが、松本市農業の場合は、行政の単位で農業振興が図られ数々の事業が実施され、それは人文地理学からみても実質地域であった。松本市農業は、その中に、盆地あるいは長野県の特徴を集約しており、松本盆地一円に展開する内陸地域の農業の有力な構成要素である。

いっぽう内陸唯一の新産都の拠点松本市は、はじめ、工業生産の拠点たるべく機能の充実強化がはかられたが、近年ではむしろ長野県を二分する、中南信の行政拠点として、学術研究の拠点として、さらに商業流通や情報サービスの拠点として変貌しつつある。それが、度重なる都市計画地域の改変となり、県下第二の拠点都市の市街地の膨張が日に日に農地を蚕食し、農業経営に土地利用転換を迫る圧力を加えている。さきに筆者が提起した二つの視座に、こうした背景がある。

本研究では、まず、松本市農業も含む日本農業全般に関わる市場開放（ガット合意）と市農業全体の状況から述べる。ついで、市街地の膨張と土地利用景観にふれながら、1990年農業集落カードの資料を単純化し、市農業の空間的な様相を描く。集落カードからは、主位作物と経営の作物構成、農家の労働力などのデータを取り出す。これらの資料に、各農業集落が、市街地に対してはどのような立地環境にあるかを加味して、市農業がもっている空間構造の描写を試みる。

## II. 近年の松本市農業の概観

松本市の農業をひとまとめに数字で示すと、たとえば、1995年には、経営耕地面積で、田

表－1 松本市農業の粗生産額の変化  
(1985年－1995年)

年次	1985年	1995年
合計	171.83億円	152.45億円
米	60.02	55.79
野菜	38.33	36.82
果樹	24.21	22.40
花き	5.34	9.35
耕種計	133.76	127.62
肉用牛	9.77	9.7
乳用牛	12.1	6.73
畜産計	37.13	24.74

関東農政局長野統計事務所『長野県農林業市町村別統計書』より 吉田作成

表－2 山辺のブドウ栽培品種の変化

年次	1989年		1991年		1995年	
品種	結果面積	収穫量	結果面積	収穫量	結果面積	収穫量
デラウェア	147ha	889 t	68ha	882 t	66ha	584 t
ナイヤガラ	30	489	34	490	34	449
コンコード	16	145	14	277	13	236
巨峰	23	254	57	764	60	688

関東農政局長野統計情報事務所『長野県農林業市町村別統計書』より 吉田作成

が3,285ha、畑が769ha、樹園地（事実上は果樹園）654ha、総農家数は6,737戸、うち専業農家850戸、などとなる。この年、農業の年間粗生産額は約127.6億円であった。

農産物の部門毎に得られる、農業生産額の変化は、農業でおこっている事態を端的に表す。そこで1985年と95年を比較し、どんな変化があったかをみよう。粗生産額の変化を簡略にまとめたのが表－1と、表－2である。

まず、農業粗生産額の部門別の構成からのべる。両年次について粗生産額が約10億円以上の部門をみれば、松本市の農業の姿がだいたいつかめる（表－1）。

米は1995年も、依然松本市の農業の支柱である。けれども、野菜・果樹・畜産などが米に代わって、次第に松本市の農業の主力になろうとする動きが、すくなくとも GATT の農業交渉が最終合意に達した1994年までは見られた。

畑地が多い松本市では、かつては畜産も重要な部門で、とくに奈良井川左岸には水田酪農という松本市固有の経営もあった。自由化の荒波の中で、依然重要な部門の一つではあるが、1995年には10億円をきり、苦戦を続けている。

いっぽう GATT 合意後も花き生産は活発で、松本市の花きはほとんどがカーネーション

である。栽培は島立地区が中心で、国土地理院の2.5万分の1土地利用図「松本」(1973年初版、後掲図-1)には、ガラス温室の記載もある。1988年3月の中央道長野線開通は出荷時期の調整を有利にし、花き生産の増加をみちびいている。

総じて、この間は、米の生産調整と米価引き下げがきびしく作用した、稲作の頭打ちと、自由化の中でも野菜と果樹はなんとか勢力を大きくはそがれずにがんばることができた、とみてよいだろう。果樹のうち、ブドウは後述するとおりである。

農業を巡る国際環境を一瞥すると、1986年に始まったGATTの農業交渉は1993年12月に最終合意に達し、農産物貿易自由化はさらに加速された。わが政府は94年10月、「ウルグアイラウンド農業合意関連対策要綱」を決定した。わが国の農産物貿易自由化の足取りは1962年に始まる。それまで103品目にのぼる農林水産物の輸入制限が認められていたが、GATT加盟以降は段階的な自由化を課せられた。1962年4月、22品目が自由化され、輸入制限の可能な品目は88となった。その10年後の1971年には制限品目は28まで減った。この過程でバナナ(1963年)、レモン(1964年)、乾燥ナツメ椰子(1970年)、ぶどう・りんご・グレープフルーツ(1971年)などの自由化が、長野県や松本市の果樹生産に打撃を与えるのでないかと懸念された。いまでは至る所で目にする、わい化栽培方式のりんご園や、ぶどう園も含め、防除、かん水の地中配管、さらに集荷出荷センターの自動化、予冷、保冷库設置等は自由化対策として急速にすすめられたものである。しかし、さきの最終合意により、95年からは米の一定量の恒常的輸入が開始され、果樹、野菜、乳製品も価格競争を強いられ、農家の生産意欲は大きな打撃を被ったままである。表-1と表-2の、萎縮気味の数値の背後に、こうした状況がある。

松本市の野菜生産でかつて白眉と目されたのはセルリであった。セルリ生産は1950年代後半から定着し、1965年ごろから県下首位の座を占めて今日にいたった。県下には他に、茅野市と諏訪郡原村があるが、栽培面積、生産量ともに松本市にはおよばなかった。1990年には松本市を筆頭に、二市一村の生産量は全県下の82%に達した。うち松本市だけで35%を越し、信州セルリの三分の一強が松本市で作られていた。1992年、松本市の栽培面積は132ha、収穫量は6,470tであった。JAの系統出荷組織の下で大消費市場との取引が安定し、生産者の結束が固く、集落あげてセルリ生産に取り組む体制が作られてきたところに松本市の特色があった。しかし市街地の膨張は核心地並柳集落を呑み、1995年には出荷量は3,230tまで後退、首位の座を諏訪郡原村に譲ったものの、旧岡田村伊深ではなお生産を続行、県下第二位を維持している。

野菜生産で近年かがやきの目だつもう一つが、「アルプスすいか」である。松本盆地のすいかの本場は、東筑摩郡波田町下原(しもっぱら)地区であるが、波田町下原は旧和田村の西部に接し、ローム層におおわれた台地の上で土地条件もよく似ており、共に中信平水利開発事業の恩典を享受できた。松本市と波田町の境界付近に1988年に野菜広域流通加工施設整備事業によって、すいかの共選場と出荷基地を作り、また1985年ごろから接ぎ木法が採用され、連作障害も克服されてきた。1995年、松本市のすいかの栽培面積は69ha、収穫量は3,950tで、核心地波田町の、それぞれ三分の一ずつである。

表-2は果樹のうち、山辺のブドウをとりあげ、この間の変化を追ったものである。消費者の嗜好の変化を反映し、デラウェアの後退と巨峰の成長があきらかである。醸造用のナ



イヤガラとコンコードはワイン製造業者と契約栽培をしており、価格の乱高下はないが、好機に高収益を獲得できるうまみには欠ける。ブドウ作地域の里山辺でも市街地化がすすみ、ブドウ園は年々、視界からも姿を消しているが、栽培技術の向上を反映してか、栽培面積の減少ほどには収穫量は減っていない。

### Ⅲ. 松本市農業の景観描写

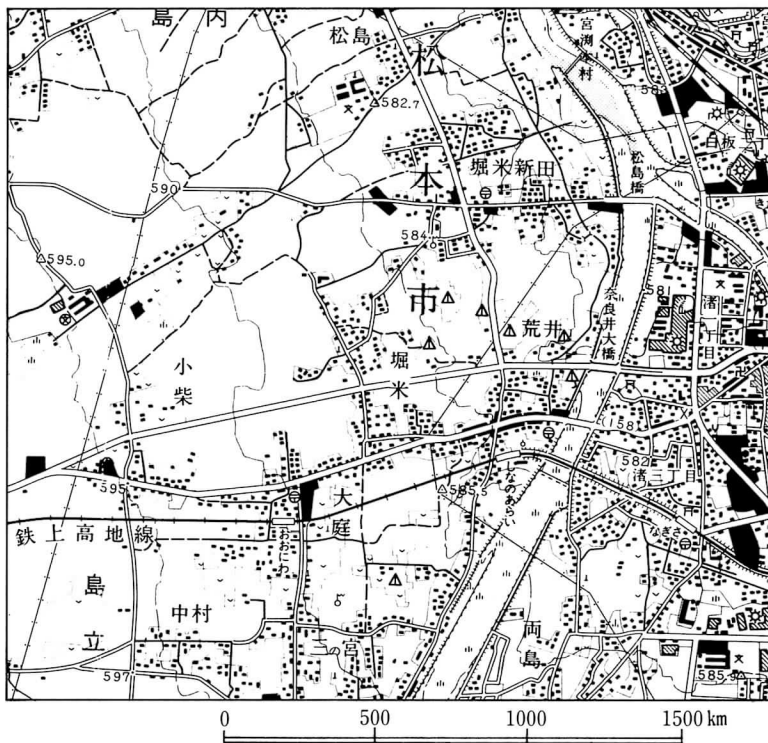
どのような農業経営がどこにどうあるかを分かりやすく示す一つの方法が、景観の描写である。以下でしばらく、松本市農業全体の、景観を追ってみる。

自動車、列車のいずれでもよい、東京もしくは名古屋方面から松本市を訪れる人は、塩尻市を過ぎ、加速していく車窓にひろがってくる広大な眺めに一時目を奪われよう。車窓の両側には、黒ボクの厚い畑地がしばらくの間続く。段丘を一つ下って村井まで来ると、平坦地はいっそう広がる。野菜や果樹園の混じる台地の畑は後方に退き、手前には水田が続く。左手はるかに、米を貯蔵するカントリーエレベーターの円筒が望める。田圃には、工場や倉庫や住宅が続々と建ち、市街化の波が激しい。南松本を過ぎ、短い薄川の鉄橋を渡れば背の高いビルに周りを囲まれた松本駅である。

今度は大糸線をたどる。北松本駅を出、まもなく奈良井川を渡る。左後方に音楽文化ホルの森を眺め、島内駅を出て中央道長野線の橋梁をくぐると、車窓左手は広い水田地帯である。かつて水路の両わきに並木をなしていたハンや柳は圃場整備で姿を消したが、屋敷を囲む木立はまだ残り、田植の時期にことに印象的な風景をなす。ほどなく梓川の長い鉄橋を渡り、いわゆる安曇野の地となる。しかし、梓川右岸の、松本市を抱く松本盆地北部も、米どころ安曇野にひけをとらない、稲作地域である。

松本駅にもどり、上高地線を西へたどる。奈良井川を渡ってのどかに走る上高地線の車窓いっぱい田がひろがってくる。6月から7月にかけては、一面の深緑の絨毯が、9月下旬からは、黄金色に変わる。大庭駅から新村駅までの田の下には、古代の条里的遺構もあって、和田堰とともに長い稲作の歴史を物語る。中央道の開通に合わせ、農地の基盤整備がすすみ、田植から収穫まで、農作業は大幅に機械化された。その水田の中に、角ばったガラスや円屋根のビニール張りのハウスも多く目にできる。松本盆地南部では、米作を専らとしている安曇野とちがい、花や野菜の施設園芸が盛んである。また、大糸線沿線の島内地区と、ここ島立地区は、ともに梓川が作った扇状地の末端にあり、それを奈良井川が侵食して小さな崖ができ、梓川や奈良井川の伏流水があちこちで湧き出ている。北松本駅の西、奈良井川の対岸、松島橋を渡った北側では、その湧水を引いたワサビ田をまだ見ることができる。地下水水位が高いから、田にも冷水が湧く。そこで1950年代から60年代にかけ、土管を埋めて排水を大規模に実施、乾田化をはかった(図-1)。

上高地線を新村駅で下り、こんどは車で、松本環状高家線(県道)を、和田堰に平行して、南にたどってみよう。和田集落を左手後方に送ると、右手はこれまた県下では敷地で最大の広さを誇る松本臨空工場団地(市営)である。その団地周辺には、乳牛を飼育している畜舎も散見する。旧和田村では、かつて酪農も盛んであった。和田堰を境に、その西側は広大な台地である。酪農とならび、加工用トマトの栽培も盛んで、良質の原料が手近に得られ、農



図一 1 国土地理院1:25,000土地利用図「松本」にみる島立地区の温室施設  
昭和48年10月撮影の航空写真と49年8月の現地調査による作成。  
温室は正三角形を二等分した記号で、図一1の範囲内に7棟ある。

協系の長野トマトや、東急系の（株）ゴールドバックが松本市に拠点工場を置いたことは周知のとおりである。

空港の南は岩垂原台地である。東を奈良井川、西を鎖川に臨む崖で限られ、塩尻市洗馬から岩垂地区を経て北端の今井にいたるまで、南北10キロほどにわたって展開している。松林の広がる台地上には戦後もしばらくの間、猪（シシ）土手が残り、昭和戦前期に一部桑園になったものの、乏水性の、干害の激しい土地であった。しかし1970年以降の国・県営中信平水利開発事業により様相は大きく変わった。水利事業の結果、今井は、松本市のリンゴ生産の中心地となった。ほぼ時を同じくして、台地北端には、県営空港と市営西南工場団地も完成、ひき続き松本平広域公園も整備され、市街地化が進んでいるが、今井の、耕地集落（集落名）より南は、農村景観をひろくのこしている。先の臨空工場団地で環状線と分かれた道路は広域農道となって岩垂原を縦断し、塩尻市桔梗ヶ原へ抜ける。今井のリンゴ栽培地は、塩尻市の市域に入ると姿を消し、代わって準高冷地の野菜栽培地帯になる。畑のあちこちに、調整池やスプリンクラーが見える。

県営空港の北をかすめ、環状線を東進すると、奈良井川の氾濫原のひろがる区域に入る。奈良井川の左岸が旧笹賀村、右岸が旧芳川村である。水を一番必要とする夏季、奈良井川は伏流してしまい、氾濫原にありながら、この辺りは田の水に非常に苦労した。笹賀や芳川は、戦後電動ポンプで地下水を揚げ、開田をすすめてきた。

村井駅から国道19号を横切り、田川に沿って南下すると、田川高校の校舎を左に望み、右手はカーブを描く中央道である。東に赤木山の木立が迫って来る。その南側の麓は、飼料作物の畑地となる。赤木山の東側は塩尻市と合併する時もめ、分村して松本市に編入した内田地区で、東の斜面が畜産の盛んな地帯になる。トウモロコンなど飼料作物が栽培されている様子は、1980年代末から90年代始めに作られた東山山麓線をたどってもわかる。

塩尻市方面から東山山麓線を北上すると、崖ノ湯線と交差し、さらに進めば中山である。千石地区を中心に、15カ年ほどを費やして2,300本ちかい漆が植えられ、採取された漆液を、国内有数の漆器産地檜川村が引き取っている。

市営中山霊園を左に見送って北に下れば筑摩である。薄川を渡り、教育文化センターを過ぎ、兎川寺の前を右折すると県道美ヶ原公園線である。入山辺目指してさらに登れば、両側は一面、ブドウ園になる。春から夏、せん定や消毒や袋掛けで人々は忙しい。9月に入ると、甘い香りが漂い、収穫が近い。県道沿いの選果場が毎日にぎやかになり、ダンボールの箱を積んだトラックが出入りする。山辺では、小粒だが甘味に富んだデラウェアや、近年では大粒の巨峰やピオーネなどの生食用ブドウをおもに作ってきた。明治初期からの栽培の歴史があり、県下でも古い産地として知られる。

県道を東に扉鉾めざして登る。後ろには松本市の市街地が一望の下に望め、好天時の北アルプスの大パノラマは見事である。薄川第三発電所の手前を左に入ると、『長野県開拓二十年史』(1966年)に紹介のある、三城である。

市役所脇から今度は、善光寺道(現国道143号)に沿って北上する。沢村から桐一帯は市街地化しつつあるが、リンゴ園やブドウ園がまだ残っている。街道に沿って並ぶ農家の建物は、土蔵作り、本棟作り、それに養蚕の二階屋と、様々な形式をいまだに多くのこしている。式内社岡田神社を左後方にすごすあたりから、セルリ畑が目に入ってくる。スケート競技発祥の地といわれる六助の池を過ぎると岡田伊深の安土(やすど)集落で、セルリ栽培の核心地である。上田に向かう国道の左手に集荷センターと予冷庫が見える。

以上が松本市の農業全体の、景観的概況である。

これらをまとめると、1) 稲作を主力に、野菜や花きを組み込んだタイプの経営が卓越する地域...奈良井川左岸の、島内、島立、新、和田、神林、笹賀など。

2) 果樹作中心の経営が卓越する地域...りんごが主力の今井・岡田の西部、ブドウが主力の里山辺・入山辺など。

1) も、2) も、長い歴史を反映したり、水掛かりなどの自然条件の制約が広い範囲におよんでいた事情から、いわゆる旧村あるいは複数の旧村にわたるひろがりをもつ。

3) 園芸や野菜作りを主とする地域...これは、米作や果樹作と違い、旧村単位よりさらに小さな範囲でまとまるものが多い。旧入山辺村の東部の、三城、厩所、旧岡田村の井深西、旧松本村の並柳、笹部、両島、さらに、旧今井村の堂村、旧中山村の千石などが具体例である。

ということになろう。すなわち、おおまかな地域区分が得られた。

#### Ⅳ. 単純化した指標による松本市農業の全域的概観

農業外はもとより、農業もまた、敗戦後、著しい技術変化を多方面にわたり経験した。それは新作物・新栽培方法・新耕作や防除の方法、また集荷選果、流通への対応など、広い範囲にわたった。ことに育苗防除や栽培技術、集荷選果の部門では、新技術や改良技術は、農家実行組合を組織し普及にあたるなど、集落のまとまりを単位に行われたものが多かった。より大規模な集荷出荷、販売、また圃場整備では、旧村も事業実行の重要な単位となった。こうしたことの積み重ねが、集落毎あるいは旧村毎の農業経営の違いを結果した。

いっぽう、諸統計のなかで、農林統計は精度が高く、含まれる情報の内容も豊富であることは周知だが、とりわけ農業集落カードは利用価値の高い情報源である。そこで1990年の集落カードをてがかりに、単純化した指標から、松本市全域にわたり、景観的要素にも注意しながら、農業のあらましをとらえてみよう。

Ⅳ節では、めいめいの集落やその集まりである旧村をまず、主位の作物からみよう。ここでは、集落の中で、たとえば稲という特定の作物の販売金額を最も多額とする農家の数が、いちばん多い集落に注目する。ついで、農家経営の作物構成に注意してみる。主位作物は、具体的にはほかの作物と組み合わせられて農業経営が展開しているからである。さらに、次のⅤ節では、農業の担い手に注目する。かかる単純化した指標で、松本市の、旧村全体を繰り返し概観していく。

ここで、旧村とは、1954年の大合併で市域に入った13カ村を指す。そこで、1923（大正12）年に松本市に合併した旧松本村だけ除いて、表現が紛らわしいので、以下では13カ村は、「〇〇村」と記す。

最初の表－1は、主位作物が稲作である集落を整理したものである。たとえば最上段の島内村には15の集落がある。うち14の集落では、〔01〕と表示された、稲の販売金額が最大である農家の数が、最も多い。ただし、一つの集落（犬飼新田）だけは、施設園芸の販売金額が最大である農家が最も多い。これ以外では、島内村は、稲作がかなり重要な作物の地域である、といえる。そして島内村と同様に稲作が重要な地位にあるのは、島立村、和田村、新村、神林村、本郷村、中山村、芳川村、寿村、岡田村ということになる。このうち、島内村から神林村までは奈良井川あるいは鎖川の左岸で、最初に述べた景観とも場所が一致する。

つぎに、稲以外の作物に注目する。

まず、〔05〕の表示は花きなど施設園芸である。施設園芸の販売額を最大とする農家が最も多い集落は、島内村、1923年（大正12年）に松本市に合併した旧松本村、島立村に一つずつ、計3集落ある。

〔06〕の表示の野菜栽培では、旧松本村に6集落、今井村に3集落、入山辺村に7集落、中山村と岡田村に1集落がある。旧松本村にはセルリの神田や並柳集落が、入山辺村には高原野菜の三城、大和合、厩所、岡田村にはセルリの井深西の各集落がそれぞれふくまれる。なお、施設園芸の温室やハウスは、別に掲げる空中写真や土地利用図に窺える（図－1、土地利用図にみる施設園芸）。

表-3 旧村単位でみた、主位作物別集落数（1990年）

旧 村	集落総数	01の集落数	05の数	06の数	07の数	08の数	09の数
島 内 村	15	14	1	-	-	-	-
旧松本村	11	3	1	6	1	-	-
島 立 村	10	9	1	-	-	-	-
和 田 村	9	9	-	-	-	-	-
新 村	5	5	-	-	-	-	-
神 林 村	7	7	-	-	-	-	-
笹 賀 村	10	5	-	-	4	麦1	-
今 井 村	14	1	-	3	10	-	-
片 丘 村	2	1	-	-	-	工芸1	-
本 郷 村	7	7	-	-	-	-	-
中 山 村	6	4	-	1	-	麦1	-
芳 川 村	4	4	-	-	-	-	-
寿 村	8	7	-	-	1	-	-
岡 田 村	7	4	-	1	2	-	-
入山辺村	21	1	-	7	13	-	-
里山辺村	13	6	-	-	7	-	-

注) 01 稲作が販売額の首位の農家が最多の集落の数

05 施設園芸が            "            "

06 野菜が                "            "

07 果樹が                "            "

08 その他の農産物が"            "

09 畜産が                "

農林統計協会（1991）『1990年世界農林業センサス農業集落カード』より 吉田作成

〔07〕の表示の果樹では、旧村単位でくくった特徴がはっきり出る。果樹を最大の販売額とする農家が最多の集落数は、笹賀村が4、今井村が10、入山辺村が13、里山辺村が7、岡田村が2であって、岡田村以外は、果樹は稲とほぼ同等（笹賀村）か、稲をしのいでいる。松本市の果樹農業は、両者の重なる場合もあるが、今井村、笹賀村、岡田村はそれぞれリンゴ栽培に、里山辺村と入山辺村はブドウ栽培に、それぞれははっきりわかる。また、笹賀村は稲と果樹がほぼ半々だが、今井村は果樹と野菜、入山辺村も果樹と野菜、岡田村は稲、果樹、野菜など、必ずしも果樹一辺倒というわけではなく、比重は小さいが異なる部門も混在する。

これらの作物のほか、麦類を販売額の主位とするのが笹賀村と中山村に1集落ずつ、工芸作物が主位の集落が片丘村に1集落みられる。

こうして、景観について、統計資料からも、松本市の農業の姿を追うことができた。ところで、稲作が主位の集落でも、農業経営の実態はいろいろである。

つまり、稲作が一応主位であっても、他部門をあわせると〔01〕の比率にきわめて近い、あるいはそれをしのいでしまう場合があるので、注意が必要である。

そうした場合の一つに、島立村の例をあげると、荒井集落は〔05〕表示つまり施設園芸が主位の農家が最多である。そこで、荒井集落以外にも、稲作が〔01〕で、稲作外の部門も比

表－4 表－3の [01] 表示集落で、稲作以外の部門も大きい集落（1990年）

旧 村	該当集落	[01] 比	稲作以外の部門			
島 立 村	荒井	43.3%	施設園芸	56.7%		
島 立 村	大庭	68.4%	施設園芸	31.6%		
〃	永田	56.0	施設園芸	36.0	野菜	8.0
〃	三ノ宮	80.0	施設園芸	20.0		
新 村	東新	62.9	施設園芸	11.4	酪農	11.4
〃	南新	57.8	施設園芸	15.6	野菜	11.0
〃	上新	75.4	野菜	12.3	麦類	7.0
〃	北新	71.1	麦類	10.5	野菜	9.2
和 田 村	南和田	46.9	野菜	36.7	酪農	12.2
〃	殿	73.9	野菜	23.2		
〃	中	81.0	野菜	14.3		
〃	町	77.4	野菜	13.2		
〃	境	76.7	酪農	13.3		
笹 賀 村	今	54.8	野菜	21.9	果樹	13.7
〃	東耕地	39.4	麦類	15.2	果樹	15.2
〃	神戸	77.4	果樹	11.3		
今 井 村	北今井	57.1	果樹	28.6	肉牛	14.3
寿 村	竹渕	53.6	麦類	46.4		
〃	下瀬黒	75.0	麦類	8.3	果樹	8.3
〃	白姫	79.2	果樹	20.8		
〃	白川	47.0	果樹	33.3		
〃	百瀬	42.1	施設	13.2	野菜	13.2
〃					果樹	13.2
〃	小池	49.4	麦	22.8	野菜	11.4
〃	赤木	36.7	果樹	34.2	野菜	10.1
中 山 村	埴原北	54.1	野菜	21.2		
〃	埴原西	66.7	野菜	13.7	麦類	5.3
〃	埴原東	44.7	野菜	28.9		
〃	千国古	56.5	養蚕	17.4	野菜	13.0
本 郷 村	三才山	61.5	野菜	18.5		
〃	稲倉	62.7	野菜	19.6		
〃	原	75.0	野菜	25.0		
〃	大村	65.7	野菜	22.9		
〃	惣社	52.6	果樹	47.4	(むしろ里山辺村のエリア)	
岡 田 村	伊深東	50.0	野菜	40.0		
〃	岡田町	67.3	野菜	20.0		
〃	東区	38.9	果樹	27.8	野菜	19.4
〃	松岡	58.1	果樹	22.6	野菜	16.1

農林統計協会：『1990年世界農林業センサス農業集落カード』

松本市の部より吉田作成、荒井集落も参考のため掲げた。

較的大きい集落をあげると、表－2のとおりである。すなわち、大庭集落、永田集落、三ノ宮集落は、それぞれが施設園芸を販売金額の主位とする農家が20から30%を越している。よって、稲作と混じりあいながら、施設園芸も盛んである集落は、荒井集落一つだけでなく、さらに三つを数えることができるのである。

同様にして新村の場合には、すべての集落が [01] 表示になっているのであるが、東新集落では施設園芸と酪農が、南新集落では施設園芸と野菜が、上新集落では野菜と麦が、北新

集落では麦と野菜が、それぞれ活発であることがわかる。和田村もまた、全集落が[01]と表示されているのだが、南和田集落では野菜と酪農、殿・中・町の各集落では野菜、境集落では酪農が、それぞれ活発に営まれていることを知るのである。笹賀村は果樹と稲作が半々ぐらいになっているが、その稲作の集落にも野菜や果樹が浸透し、やはり多彩である。今井村では北今井集落だけに稲作が卓越するが、そこでも果樹や肉牛が営まれている。

奈良井川左岸を下流から上流に向かうにつれ、地形は氾濫原から段丘面に移っていくが、農業経営も、島内村の稲作単一経営から、島立村の稲作プラス施設園芸、和田村や笹賀村の、稲作プラス果樹、野菜プラス酪農もしくは肉牛というように、次第に多様さを増してゆき、大部分が段丘上で、稲作はごくわずかで果樹と野菜の卓越する、最南端の今井村に至る。ここまでは、地形は、広々とした氾濫原と、これまた広大な段丘面が支配的であった。中央道長野線が通過したこともあって、交換分合をふくむ耕地整理が大規模にすすみ、圃場の区画は大きく整い、道路や水路は直線状に走っている。和田村や今井村では、張り巡らされたスプリンクラーや配水池に、1970年以降整備されてきた中信平水利開発事業の成果をうかがうことができる。

さて、奈良井川右岸はさきの左岸とはすこぶる対照的である。狭い耕地が山麓までのび、台地や丘陵が小さく急な傾斜の氾濫原と交錯し、いたるところに階段状の田や畑地が見られ、耕地の境には石垣が積まれ、道路は狭く屈曲が多い。全体に標高が高く、それらの様相はまさしく信州農業の縮図といってよい。しかも、複雑な小さな地形の中で営まれている農業は多彩で、これまた信州農業の典型である。

奈良井川右岸についても、さきの表-4を手がかりにして、稲作が販売額の主位で、しかし農業の実態が多様である集落に注目する。対象は、寿村、中山村、岡田村、本郷村である。それに先だち、芳川村と、1923年に松本市に合併した旧松本村とは類似した性格なのでこれから述べると、どちらも消費地の松本市を背後にひかえ、露地作りのそ菜類、葱、ことに筍作りなどでかつては名を知られていた。そのうちの旧松本村並柳集落は地方都市近郊の野菜生産にとどまらず、京浜や中京の大消費地を狙い、1960年代から70年代に、セルリの産地へ急成長した。

寿村は西を田川に、東を牛伏寺川に限られ、傾斜の急な扇状地上で、養蚕のすたった敗戦後は地下水揚水による開田と、桑畑の野菜や果樹への転換に活路を求めてきた。白川や白姫には1980年過ぎまでため池が残り、水に苦労した所でもあった。排水がよいため、減反の水田転換事業では麦類の作付をすすめた。

表-4からは省いたが、旧片丘村内田集落は稲作と野菜と果樹、その南の牧の内集落は稲作はなく、工芸作物(葉タバコ)が販売された農作物のすべてである。牧の内は標高850m上に展開している緩斜面上の集落で、段丘れき層(松本盆地最古の梨ノ木れき層について古い片丘れき層)の上にある。

中山村には養蚕が長く残り、千国古屋敷集落はその残照で、そこから北に望む現在の中山霊園一帯は1975年まで一面の桑畑であった。国道19号のバイパスにもなる東山山麓線整備の関連で水田の耕地整理もすすみ、田の中の野菜栽培も増え、春先にはビニールハウスの反射光がまぶしい。

女鳥羽川の東の本郷村は市街地化が著しいが、最上流の三才山集落から大村集落までは水



田と野菜が組み合わされ、南端の惣社集落では果樹が多くなる。惣社はむしろ里山辺村の果樹のエリアに含まれるとみられる。

岡田村は、稲作をベースにおきながら、北部の伊深東や岡田宿周辺では野菜、南部の松岡では果樹と野菜という構成である。

こうして表―4に整理した資料と、景観とを手がかりにみてくると、奈良井川右岸では、稲作は、主位ではあるが、販売のために大規模に栽培するというより、それをベースに、様々な作物と組み合わされるという色合いが濃いいといえる。奈良井川へ市街地東部から合流する薄川の、中流および上流部沿岸の里山辺村と入山辺村は、稲作の販売額の比が全般的に小さいので、表―4から省いた。各集落の作物構成は、稲プラス野菜または稲プラス果樹（入山辺村の集落）あるいは稲プラス果樹（里山辺村の集落）の、いずれかの型に入る。また、入山辺村の薄川沿いの急傾斜地にある8集落（西桐原、東桐原、宮原、寺所、竹ノ下、厩所、大和合、三城）では、稲を主位とする農家はゼロである。旧片丘村牧ノ内集落同様、地形と標高の双方がもたらす結果であり、入山辺村8集落については次の記述も参考になる。

…終戦後の国の緊急開拓政策に従って、各開拓地とも食糧増産の方向に営農形態を進めたが、吾が組合の如き高冷地での作物には限度があり何が適するか何が採算的であるか確たるものを掌握しかねて雑穀やら馬鈴薯の栽培、薪炭生産または農外労働と最低生活で最初の十年は経過した。

その後食糧事情も好転し、経済状況の変化に応じてそ菜栽培の有利性と適地適作であることに着目し、白菜、かんらん、レタス等の大量栽培による共同出荷により十年の経験を積むに至ったが、組合員一同増産に意欲を燃やし、七桁農家の続出で生活も向上し、益々発展の途上にあることは、過去において営農不振で開拓地を自衛隊演習地に提供して集団離農に大半が動きだしたことがあった頃を思いおこせば感慨無量共に嬉しい限りである…

山ひだの開拓地美ヶ原 松本市入山辺 美ヶ原開拓農業協同組合 組合長 大沢 亀雄  
長野県開拓二十年史編集委員会『開拓二十年史』 pp.257-261所収。

「高冷地」とは、農政上の用語で、長野県では、標高が1,000mから1,500mの区域が該当する。また、これより低所の、600mから1,000mまでが、準高冷地である。しかし、標高が800mを越すと、穀物や果樹の栽培はかなり困難になる。それで、第二次大戦前まで、標高800m以上の区域では、ごく一部に夏野菜作りなどがあるのみで、集約的な農耕は営まれてはいなかった。敗戦後は、そうした土地でも利用しなければならず、穀物以外の作物か、畜産かに活路を求めることになった。これが開拓で、松本市の開拓地には、さきの入山辺村の三城の外、本郷村の三才山、中山村の千石第二、今井村の西原開拓などがあった。1965年ごろまで残ったこれらの開拓地は、いずれも高原野菜の栽培に活路を見いだした。厳しい気象のほか、いずれの開拓地も厚い風化火山灰（ローム）に覆われ、土壌改良でも非常な苦闘をよぎなくされた。



## V. 農業の担い手（従事者）の状態

### V-1 稲作の省力化と兼業農家の増加

1950年代、農地改革が一段落し、食糧増産めざして生産力増強がはかられていたころ、新民法の定める均分相続が、農村では深刻に受けとめられ、二三男問題が、重く苦しくのしかかっていた。敗戦後の混乱と矢継ぎ早の諸改革で目立たなかったが、農村のいわゆる過剰人口は「満州開拓」をひきずってきていた。農地開放も、問題解決の糸口を示し得ず、ブラジル移民が熱心に説かれていた。

今日でこそ、工業化一般を、あしざまに批判できるようになったが、農村の重く苦しい問題を解消したものからも、目をそらすことはできない。

1950年代後半、米価の安定や、しばらくの養蚕の活気、果樹栽培の隆盛、さらに都市的生活様式の普及が惹起した牛乳飲用や高原野菜の消費の伸びの中で、多くの農家の二三男は、高校までは出してもらい、あとは自分で生きる糧を探す、という形が、地方でも工業化の進行とかみあい、農外就業が定着した。

ひき続く高度成長の中で、都市近郊あるいは通勤圏に入った地域の農業のうち、ある部分では稲作の省力化を背景とし、あととりまで勤めに出、やがて「土日百姓」なることばが生まれた。信州の多くの地域では通勤の範囲内に雇用先が得られ、季節出稼ぎはあまり目だたなかった。しかしこうした利益に十分浴しえない、小都市からも遠い農山村で、1960年代半ば、はやくも過疎の進行をみるようになる。

もう一つは、早くから養蚕や稲作依存を脱し、高度な商業的農業を展開した地域で、ここでは、働き手の多くが農業に踏みとどまった。こうした、二つのタイプの地域が松本市の農業にもみられた。

そして、都市近郊の、野菜や果樹の高度な商業的農業の地域でも、お嫁さんさがしにやっきとなり、あとつぎはいないという事態で、農家の危機感は深刻である。

ここでは、1990年の農業集落カードから、農業の担い手の様子を描いてみよう。経営の作物構成が多様なことはすでにみたが、農業の担い手を、集落を単位に追えば松本市の農業の、どんな姿がうかび出るであろうか。

### V-2 農業経営の立地環境による地域区分

農業の担い手のあり方を左右するという意味あいでは、今日の松本市農業の経営に強い影響を与えている事柄の第一は、市街地膨張と関わる土地利用の競合、第二は農業の集約度すなわち作物選択と経営の特化の度合である。

そこで、表-6以下の農業の担い手の考察に入る前に、松本市の農業地域を、経営の特化や集約状況と、農業外の土地利用との競合の状態の、二つから区分しておく。

松本市に合併する前の、旧村を、類似性が強い一つのまとまり、とさしあたり考えると、旧村は、次のように類型化できよう。区分の目安は、Ⅲでふれた、景観と、Ⅳでふれた、主位およびそれと組まれる作物構成である。

第一のグループに、旧村のほぼ全域で市街地化が進み、特異な経営のある集落だけに農業

表一 5 旧村の類型化のまとめ

類 型	内 容	具 体 例
市街地混在型 = A型	もともと市街地縁辺にあり、 いまや全域が市街地化してい る	旧松本村
市街地外縁型 = B型	部分的に市街地化しているが 農地も広く残り、農業も依然 続けている	岡 田 村 本 郷 村 里山辺村
通勤流出型 = C型	市街地化の影響は小さいが、 省力化しやすい稲作に集中し たり、元来耕地が狭い	入山辺村 中 山 村 島 内 村 島 立 村 新 村
集約的多角経営型 = D型	農業経営が革新的意欲的で従 事者もあとつぎもまだみられ る	和 田 村 今 井 村 笹 賀 村

農業および土地利用景観、90年農業集落カードの作物構成から筆者が区分した。

が残っている類型（A型）、第二のグループに、部分的には市街化されているが、旧村全体ではなお農業が継続されている類型（B型）、第三のグループに、市街化はごく一部のみだが、元来稲作への依存が高く、省力化の結果通勤兼業がひろくみられる類型（C型）、第四に、さしあたり市街地化の影響を免れ、またその村で農業経営が個性ある発展をとげて、いまなお多くの人々が農業に従事している類型（D型）、の四つである（表一 5 参照）。

こうして農業地域の最も基礎的な区分に、AからDまでをあげた。これに加え、農業の立地環境を決める松本市固有の要因に、市街地の面的広がりを制約してきた河川がある。中でも、奈良井川の影響は大きい。そこで、A—Dそれぞれの類型と河川に規定された位置との組合せを確認しておく。奈良井川右岸は、A型の旧松本村、芳川村、B型の寿村、中山村、里山辺村、本郷村、岡田村、D型に近い入山辺村、から構成されている。対して、奈良井川の左岸は、北から南へ、C型の島立村、C型の変形した島内村と新村、D型の笹賀村と和田村、高度なD型の今井村、から構成される。

これらを一括すると次のように整理できる。

奈良井川の左岸と右岸に対応した地域区分

市街地中心に近いA型地域

左岸の村々

その 1. 水稻卓越地の島内村

その 2. 水稻、野菜、酪農のある和田村、施設園芸の島立村

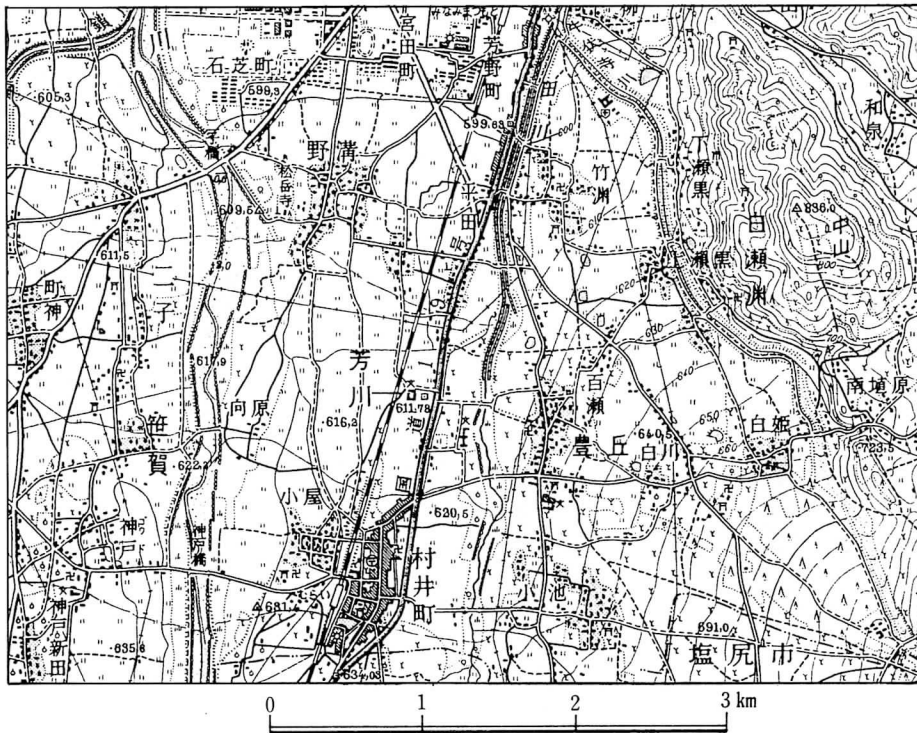
その 3. 農業の担い手の多い今井村

右岸の村々

その 1. 市街地の外側で依然農業を続ける寿、岡田、本郷の三カ村

その 2. 通勤流出であとつぎのいない里山辺村と入山辺村

ここで、A型地域は奈良井川の右岸だが、すでに市街地に埋没しているので、分離した。



図－２－１ 昭和37年発行の国土地理院1：50,000地形図「松本」にみる市街地南部の土地利用の様子  
昭和34年修正測量，36年資料修正（道路など），37年8月発行。

こうした区分をもとに、有専従者農家率や、後継者の状態を吟味していく。

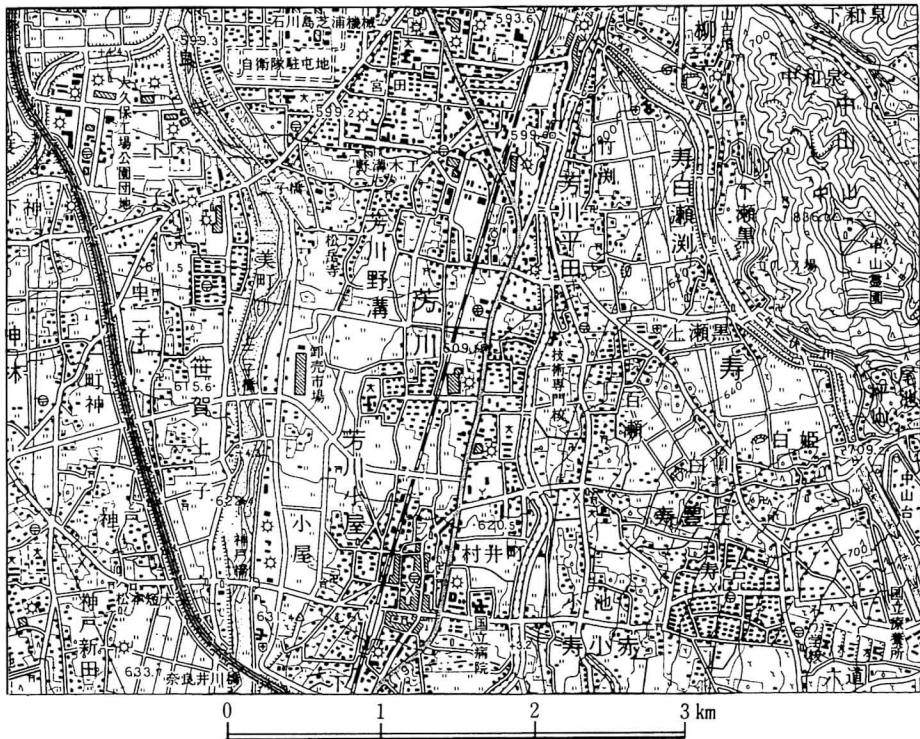
指標を最初から「担い手」として一括しないのは、なるべく生の農業の姿に近い描写をしたいからで、記述が反復したり長くなるのは止むを得ないと考える。

## V-3 有專從者農家率

ここで「有農業専従者農家率」というのは、その集落で、年齢や男女を問わず、農業専従者のいる農家がどれぐらいの割合かを表す。表—3—1の並柳集落の例をとれば、有専従者農家率は、〔051〕+〔052〕+〔056〕の合計を総農家数で除し、100を乗じて70.22%と求まる。この値が大きいと、農業従事者が相対的に多く、反対に、小さいと、休日には農作業を手伝うかもしれないが、平素は農外就業者である人が多いと理解できる。以下、立地区分の類型にそいながら、有専従者農家率を吟味していく。

A型からみる。旧松本村はすでに全域が市街地化している典型例である。この類型の地域では、農業経営のあり方の如何を問わず、農業外からの土地利用変化を促す圧力は強大である。強大な圧力に抗しきれず、農地を売却もしくは利用転換した結果が、働き手からみれば、農外就業者の増加（農業専従者率の低下）として表れる。

旧松本村で、集落の有専従者農家率が30%をきっている、つまり専従者のいる農家が三分



図－２－２ 平成 7 年発行の国土地理院 1:50,000 地形図「松本」にみる市街地南部の土地利用の様子

平成 4 年の 2.5 万分の 1 地形図から編集，平成 6 年修正，7 年 1 月発行。

の一以下であるのは，放光寺，笹部，鎌田，高宮の四集落である。これらは市街化の激しい集落周辺の景観からも，容易に見当がつく。これと反対に，農業生産をなお継続する見込みの，あとつぎがいる農家は，並柳集落だけで，ここでは有専従者率は 70% と高い。野菜栽培は単位面積当りに必要な労力の投下が大きく，狭い耕地でも収益があるので，市街地化に対しては抵抗力が大きい。両島，征矢野，井川城，神田，三才の各集落では，あとつぎこそいないが，有専従者率はいずれも五割以上で，どこも野菜を作っており，市街化の進行にあらうい続けている。

旧松本村と同じ類型に，芳川村，寿村，里山辺村が入る。有専従者農家率が三分の一前後と小さいのは，芳川村では野溝・平田，寿村では竹淵・白姫・小池（33.7%），里山辺村では新井・湯ノ原・藤井・荒町・西荒町・北小松・林の各集落である。どの集落でも，膨張する市街地が間近に迫っている。この中で，果樹栽培の卓越する里山辺村の，あとつぎのいる集落は，南小松，兎川寺，藤井，上金井の四つである。あとつぎあり，とはいえ，その農家数は一集落で 1 戸，多くて 3 戸である。野菜栽培と同様，防除，選果出荷，栽培技術の研究などは，相当数の農家が協力してはじめて実を結ぶものであり，農家が深刻な危機感をいだくのは無理もない。果樹栽培は手がかかり，その上収穫は年一回で，野菜よりもかなり広い耕地が必要であり，また頻繁な防除が住宅地化と相いれないこともあり，市街化の圧力には野

表－6－1 旧松本村 A型 農家の労働力保有状況（専従者，あとつぎ等。  
数字や記号に関する説明は下の欄参照）

集 落 名	主位	総農家数	[051]	[052]	[053]	[055]	[056]
放 光 寺	07	13	1	0	0	1	2
宮渕本村	06	6	1	0	0	0	2
両 島	06	18	12	0	0	5	3
笹 部	06	27	7	0	0	5	1
征 矢 野	06	34	14	0	0	7	3
鎌 田	01	6	0	0	0	0	1
高 宮	01	30	2	0	0	0	3
井 川 城	01	48	11	0	0	6	11
並 柳	05	47	21	3	3	12	9
神 田	06	54	22	0	0	1	0
三 才	06	6	4	0	0	1	0
計		289	95	3	3	41	42

数字等の説明 051 男子農業専従者が一人の農家戸数  
 052 “ 二人以上の農家戸数  
 053 男子跡継ぎ専従者のいる農家戸数  
 055 60才未満男子専従者のいる農家戸数  
 056 農業専従者が女子だけの農家戸数

農業専従者の年齢分布（農家単位でなく、集落の従事者数単位）

11表示の集落：放光寺，笹部，井川城，神田，三才

12表示の集落：両島，征矢野，並柳

20表示の集落：宮渕本村，鎌田，高宮

凡例：11表示は，65才未満の男子専従者が農業従事者の10%未満。

12表示は， “ “ 10-20%。

20表示は，65才未満の男子農業専従者なし。

20表示だと，65才以上の高齢者が女性だけが農業に従事しているだけなので，高齢化，女性化が一番深くすすんだ集落。12表示は，働き盛りの男子労働力がいくらかはある状態，11表示は働き盛りの男子労働力が相対的に少ない状態。

「主位」は表－3 参照。

菜よりもさらに弱い（JA 松本ハイランド入山辺果樹部会，1996）。

次のB型は部分的に市街化されながらなお農業を続ける地域で，岡田村と本郷村がこの部類に入る。岡田村で専従者農家率が三割をきって小さいのは，岡田町，東区，それに次ぎ松岡（32.7%）である。いずれの集落も，宅地化がかなり進んでいる。しかし旧松本村のような，大規模小売店舗や工場ができるのとは異なり，ほとんど個人住宅か貸家またはアパートの類で，農地の転用はより小規模分散形態である。岡田村で逆に専従者農家率の大きいのは，伊深西（75.7%），塩倉（63.2%），神沢（70.2%）の各集落で，いずれも野菜または果樹栽培に特化した経営である。本郷村では，三才山，稲倉，原，水汲，惣社が専従者率が三割をきっている。本郷村はどの集落も，専従者農家率が40%以下で，村全体が専従者率が小さい。またどの集落にも水田があるが，もともと耕地は狭く，大規模な稲作の展開は困難であったから，早くから農外就業が進んでいた。稲倉や原は，近年，城山トンネルの開

連事業で圃場整備が完成し、水田の省力化が促進され、農外就業がさらに増える趨勢にある。いちばん南の惣社集落は、横田方面からの住宅地化にすでに半分以上包囲され、果樹栽培が困難になっている。

C型は通勤流出が大きい地域で、入山辺村と中山村がこの類型に入る。どちらも背後に山地を背負い、平坦な耕地に乏しく、商業的農業を取り入れた一部を除き、敗戦後不振をかこつ養蚕に代わる有力な農業を確立できず、農外就業の機会が増すにつれ、兼業が増えた。市街化による直接の影響は小さいが、道路が改修され通勤圏内に組み込まれた地域でもある。耕地が元来狭いか、稲作の省力化が進んで通勤兼業が増え、その分、農業専従者が減ったのである。入山辺村では、橋倉、南方、寺所、中村、一ノ海、大仏、厩所、などは20%をきっており、とりわけ駒越、牛立などは0%である。どの集落も幹線道路に面し、通勤が容易だが、集落のすぐ背後に山地が迫り、耕地に乏しい。入山辺村は、耕作できる土地の広狭、有力な商品作物の有無が、有農業専従者率の、集落間の差を著しく大きくしている。入山辺村には、農業外の用途との土地利用競争はない。

中山村では、千石第二を除く和泉・埴原北・埴原東・千石古屋敷の集落が三割をきり、20%台にあり、埴原西も31.3%なのでほぼ同じである。千石第二集落は、有専従者農家率が75%で群をぬいて大きい。入山辺村で千石第二集落とよく似ているのが三城集落で、有専従者農家率は87.5%である。両集落とも敗戦後の開拓地で、野菜や工芸作物の栽培に特化、集約的経営を確立した。

つぎは島内村と新村である。本研究ではC型としたが、どちらも広い平坦地に展開した稲作卓越地である。土地改良や圃場整備を積極的にすすめ、機械化、省力化を実現してきた。またどちらにも、1970年に始まる減反政策を受け、水田をパイプハウスに替え、野菜や花きへ転作を図った集落がみられた。

島内村の集落のうち、有専従者農家率が二割以下であるのは、北中、南中、東方、上平瀬、平瀬川西、下田、山田である。ことに下田と山田は比率が0%で、耕地に乏しいことに対応する。また、比率が二割台なのが、小宮、青島、新橋、町、北方、犬飼新田である。残りの二集落、高松と平瀬川東だけが三割を越すが、平瀬川東が31.8%、高松が41.4%であり、高い比率ではない。水稻栽培の労力配分の様子、例えば請負耕作の進展状況などに研究上関心が向くところである。

島内村が稲作に特化しているのに比べ、島立村と新村は、米の転作以前から専業農家が施設園芸や野菜栽培を取り入れており、集落毎に差があるが、有専従者農家率はどちらも島内村よりは大きい。新村は島内村よりも、圃場整備事業の開始が早く、それが野菜栽培の導入をかえって早めた。新村は耕地の状況や農業経営の集落間の差がなく、これが、有専従者農家率の集落間の差をも小さくしている。水田転作は新村ではある程度定着して、農業従事者を村にひきとめているようである。新村と似て、島立村も早くから米の転作を実施してきたのであるが、1980年代なかば以降、合同庁舎、博物館、筑摩高校等の大規模な農地転用があり、とりわけ1988年の長野線開通後は、各種商店、倉庫、工場などが急速に増え、これが島立村の農業経営に大きく影響している。そのため、新村と較べると、有専従者農家率の、集落間の差が大きく出てくる。すなわち、新村の5集落の比率は四一五割の範囲におさまるのに対し、島立村では、三ノ宮・北栗が10%台、堀米・町区が20%台、大庭・小柴・南栗が30



%台、これらに対して、比率の大きい集落は中村（53.8%）、荒井（60%）、永田（80%）となっている。背後に、転用にともなう農地の減少、長野線関連事業である耕地整理の結果の省力化、そして、施設園芸では、水田の減少にもかかわらず、残った耕地をより集約的に使い、農業経営をより高度化し、専従者率を維持するなどがあり、集落間の差を大きくしている。

最後のD型は、集約的多角経営の卓越する地域で、笹賀・和田・今井など三カ村があてはまり、農業就業者がいぜん多い地域である。はじめに笹賀村をみる。有専従者農家率が二割台なのは神戸（23.5%）と下二子（21.3%）だけで、他集落では、全般に高い。笹賀村は1960年代なかばまで、奈良井川の伏流水を汲み上げ、熱心に開田事業をしてきた。中二子集落などは、田の形状を大きく変えない転作をし、麦類が主位作物である。その笹賀村も、さきの神戸集落には、1965年以降、市営西南工場団地が造成され、また下二子集落でもこれに続く市営大久保原工場団地が造成され、それぞれの集落に土地利用変化の大きい影響を与えた。笹賀村で、有専従者農家率の大きい集落は、上小俣（75.4%）、幅下（91.7%）、下小俣（60%）、神戸新田（48.8%）であるが、いずれも主位作物が果樹である。

和田村も、下和田（19.0%）境（25.8%）以外の集落は有専従者率が全般に大きい。今井村とならんで、和田村にも有あとつぎ率が10%を越す集落がある（南和田集落）。松本市で、これが10%を越す集落のあるのは、和田村と今井村だけである。下和田集落の有専従者率が19%であるのは、同集落の主位作物が稲で、それへの特化が大きく、稲以外の多様な作物を欠くのと対応していよう。

今井村では、有専従者農家率がいちばん小さいのは南耕地（36.4%）である。それについて、中村集落（59.1%）がある。その外の12集落はすべて、有専従者率が六割を越えている。西原開拓集落はこれが100%であるから、13戸の農家すべてに専従者がいることになる。さらに注目されるのは、有あとつぎ率が、松本市のどの旧村にもまして大きいことである。これが10%を越す値の集落は、上新田（11.6%）、堂村（14.3%）、下新田（15%）、南耕地（15.6%）、北耕地（10.7%）の五つ、これに近い9%台の集落は、中村と古池の二集落であった。14集落のうち、7集落までは、十分かどうかはさしおいても、確実に有あとつぎがあり、松本市では、唯一、今井村だけが、近い将来の不安が小さい。また、旧村単位でみた場合、有あとつぎ農家総数が一番多いのも今井村で、50戸を数える。

松本市の農業の特色は、第一に、県都長野市（95年人口35.5万）に次ぐ県下第二の規模の都市（95年人口20.5万）であるがため、市街地化との土地利用をめぐる競合も農業にとっては大変な重荷である。これは市街地化が進む縁辺部という場所的に限定された所で顕著である。いかに集約的な農業経営でも、都市的土地利用との競合では、農業は絶対に不利である。都市的土地利用との競合にさらされ、たのみの農地がなくなってしまうのだから、有あとつぎのできようはずはない。

## VI. 農業従事者の年齢構成とあとつぎ

### VI-1 A型地域の農業従事者の年齢構成、旧松本村と芳川村

農業従事者の年齢構成について、さきに掲げた表—6—1をもとに、1923年に松本市へ合併した旧松本村からみる。表の下欄の、「農業従事者の年齢分布（農家単位でなく、従事者単位）」とある表示がこれを表す。凡例のように、「11表示」、「12表示」などが65歳未満の男子専従者の農業従事者に対する百分比である。

90年現在、65才未満の男子農業専従者が農業従事者総数のどれぐらいかを、集落毎に追うと、各集落は、その比率によって、10%未満と、10-20%と、65才未満の男子専従者がいない集落、の三つに分かれる。10-20%の集落が、相対的にはいちばん人手があり、両島、征矢野、並柳の三集落がこれにあてはまる。10%未満では、放光寺、笹部、井川城、神田、三才の各集落が該当する。65才未満の男子専従者のいないのは、宮淵本村、鎌田、高宮である。この三集落は、高いビルが建ち、市街化が著しく、これは土地利用景観とも一致する。両島、征矢野、並柳の三集落は、農地はまだ残るものの、市街地による包囲の完了は近い。

つぎに、表—6にしがいい、農業専従者やあかつぎの有無、農業専従者が女子だけなどにつき、吟味していく。跡継ぎの有無を表す、[053]の欄をみると、並柳集落だけに、あかつぎのいる農家が3戸みられる。このあかつぎをふくみ、60才未満の男子専従者のいる農家数では、並柳集落が12戸と、これも最も多い。ほかには、征矢野7戸、井川城6戸、両島と笹部も6戸ずつである。並柳のほか、両島、征矢野、笹部では、60才未満の男子専従者のいる農家があることが、男子専従者が相対的に多いことと対応している。

最後の[056]の欄は、農業専従者が女子だけの農家数である。専従者が女子だけ、という農業では、高度な商業的農業の展開は難しいであろう。これが井川城と並柳に多いのは、わずかな水田でいわゆる土日百姓をしているせいであろうか。両島、笹部、征矢野の三集落では、[051]（男子専従者が一人はいる）と[055]（60才未満男子専従者がいる）と対応している。この三集落のいずれも、主位作物が野菜である。この付近では周囲を住宅地に囲まれながら、なおパイプハウスの中で野菜作りが続けられている。手がかからない水田からは男子の専従者は抜け、土日百姓が展開し、残った小さな畑地で、ハウスの中で集約的な野菜栽培が営まれ、人手はここに集中する、というのがこの三集落の農業の姿である。並柳集落でも、水田の省力化が率先して進められた。

かつて最も集約的で高収益農業の展開した並柳集落でさえ、後継者のいる農家はさきのとおり3戸しかない。あかつぎがないというのは、たしかに農業自体の問題でもあるが、並柳の場合には、農業をしたくても、市街地化がはげしくて対抗できない実情である。ふつう、都市近郊農業の場合、教科書的にいえば、単位面積当り収益がいちばん大きいはずである。ところが、旧松本村では、市街地化の圧力が強く、農業の維持が、土地利用上困難なのである。並柳集落も、そのような区域の一角にある集落である。集落を南北に貫く「国体道路」は1963年の農道が基になっていた。76年、これが市道に編入され、幅員12mとなり、78年には「やまびこ国体」にあわせ、県知事指定の都市計画道路となり、おりからの三才山トンネル貫通もあって、日通過車両が1万台を越えた。これに追い打ちとなるように、1983年には全域が市街化区域に編入され、現在におよんでいる。

並柳集落を含む旧松本村の北部を通過する野麦道（国道158号）に交差して、1962年、国道19号のバイパスができた。疎開工場の便を図り今次大戦末期に設置された南松本駅は、貨



物駅として戦後あらためて拡充され、それが目玉になり、1965年以降周辺に木工団地や住宅団地ができた。野麦道自体も国体前の1976年に渚と下新の区間が4車線に広げられ、直線化された。そうした土地利用条件の変化が、旧松本村の農業の行方に決定的に作用している（松本市並柳農家組合五十周年記念委員会、1994）。A型の旧松本村に類似するのが、その外側にくる芳川村である。村井駅を出た松本方面行列車の、車窓にひろがったかつての田園風景は、日ごとに失われつつある。北端の野溝や、南隅の村井では、まず田の方から土地利用が変わり、屋敷林に囲まれた小さな畑地はむしろ最後まで残る。残った畑地では、花きなど集約的施設園芸や野菜栽培が営まれている。並柳集落をふくむ旧松本村や、国道19号沿いの芳川村で目につく光景である。芳川村の四つの集落中、65才未満の農業専従者が10%以上20%未満の集落は、村井一つのみで、ほかはみな10%以下である。絶対数ではまったく少ないが、田を「捨てて」野菜栽培に集中してきた結果、野溝と村井には、2戸ずつ、あととりのいる農家がある。あととりを別としても、60才未満の男子専従者のいる農家は、村井に13戸、野溝に6戸だけである。金属パイプで組み立てたビニールハウスの中で、小さいが、活気を残した農業がまだ営まれている。

#### VI-2 奈良井川左岸 その1.

稲作卓越地島内村の農業の担い手、年齢構成とあとつぎ

表-6-2にしたがい、水田風景の卓越する島内村（C型）の集落を、農業の担い手の年齢構成とあとつぎの面からみる。農業従事者総数中、65才未満の男子専従者がどれぐらいいるのかを集落ごとにみると、島内村の15の集落は、高齢化、女性化が進んで、65才未満の男子専従者がいない、東方・下田・山田の3集落と、残りの、65才未満の男子専従者率が10%未満の12集落（小宮、高松、北中、南中、青島、新橋、町、北方、上平瀬、平瀬川西、平瀬川東、犬飼新田）から成る。前者の3集落はどれも奈良井川右岸に位置し、山田集落は犀川丘陵南端芥子坊主山を南に望む小さな盆地状の窪地で標高850mにあり、あと2集落は奈良井及び犀川の段丘崖が迫り、平坦地に乏しく農業の展開は困難な土地である。後者の12集落は、いずれも、さきの年齢の男子専従者が10%未満で、最初の3集落ほどではないにしても、その比率が高いほど相対的に若い働き手が増す理由から、これらだいたい高齢化している。

表は省いたが施設園芸が稲作とならんで経営される島立村も、担い手からみると、島内村によく似ている。荒井集落だけが65才未満男子専従者率が10%以上20%未満で、他の9集落はすべて10%以下である。しかしその中で、荒井集落と南栗集落には、60才未満の男子専従者のいる農家が10戸ずつある。これより少ないが、永田集落と大庭集落には、さきの農家が4戸ずつあって、施設園芸の経営に対応している。

和田村よりも松本の市街地に近く、また1988年春開通した長野線に分断された観のある島立村では、関連圃場整備事業も実施され、水稲作の省力化がさらに進んだ。国道158号も村を東西に貫いて走り、沿線の土地利用の変化は激しい。市街地化の波は奈良井川を西へ越えつつあり、景観もさきの並柳集落に近づいている。

しかし、若い働き手が少ない状態の全域的なあらわれは、機械化、省力化がすすんで通勤兼業が可能になっている、水稲栽培卓越地域だからであろう。

表－6－2 島内村 C型 農家の労働力保有状況（専従者、あとなぎ等）

集 落 名	主位	総農家数	[051]	[052]	[053]	[055]	[056]
小 宮	01	112	18	3	3	10	9
高 松	01	128	35	3	1	11	15
北 中	01	30	3	0	0	3	0
南 中	01	30	2	0	0	0	2
青 島	01	48	7	0	2	5	3
新 橋	01	39	1	0	0	0	2
東 方	01	33	1	0	0	0	2
町	01	59	9	1	1	5	4
北 方	01	49	7	0	0	3	4
上 平 瀬	01	11	1	0	1	1	1
平瀬川西	01	48	8	0	0	0	1
平瀬川東	01	22	3	1	0	1	2
下 田	01	5	0	0	0	0	0
山 田	01	22	0	0	0	0	0
犬飼新田	05	10	2	0	0	0	0
計		646	97	8	8	39	45

農業専従者の年齢分布（農家単位でなく、従事者数単位）

11表示の集落：小宮，高松，北中，南中，青島，新橋，町，北方，上平瀬，平瀬川西，平瀬川東，犬飼新田

20表示の集落：東方，下田，山田

凡例：11表示は，65才未満の男子専従者が農業従事者の10%未満。20表示は，65才未満の男子農業専従者がなし。11でも，高齢化が相当すすんでいる。20は高齢化と女性化が一番深刻化している。

「主位」は表－3 参照。

## VI－2 奈良井川左岸 その2.

水稻，野菜，酪農のある和田，果樹のある笹賀，施設園芸のある島内の各村の担い手と年齢構成

和田村は稲作のほか，野菜や酪農に従う農家もあり，水稻と並行しながら，多様な農業が展開している。9つの集落があるが，南和田集落だけは65才未満の男子専従者が農業従事者総数の10%以上20%未満である。他の八集落では，65才未満の男子専従者が従事者総数の10%未満である。

60才未満男子専従者のいる農家数を集落別にみると，南和田18戸，殿13戸，太子堂12戸，衣外7戸，町6戸のようである。すでに作物と農業経営についても述べたが，農家総数55戸を擁する南和田集落の，稲作を農産物販売額の主位とする農家の比率は，46.9%と，和田村ではもっとも小さく，逆に野菜を主位とする農家の比率が36.7%といちばん大きい。さらに酪農を主位とする農家の比率は12.2%である。集落の西へは歴史上名高い和田堰の延長が来て稲作を支え，そのさらに西は波田町の段丘（波田段丘）である。広大な平坦地あるいは段丘の緩斜面の有効な活用の努力の蓄積が，多様な農業と，これに従事する人の多さを結果してきた。

笹賀村と新村では、65才未満の男子専従者のいる農家率が10%から20%の集落数がやや増える。笹賀村では、上小俣、はば下、東耕地の3集落が、新村では東新、南新の2集落が、それぞれこの部類に入る。笹賀村の他の7集落と、新村の3集落はどれも、さきの65才未満専従者のいる農家率が10%をきり、担い手はさらに高齢化している。また、両村とも、65才未満の男子専従者がいない、高齢化の最も進んだ集落はない。

60才未満の男子専従者のいる農家数を集落別にみると、笹賀村では、上小俣（24戸）、神戸新田（11戸）が目だつ。どちらも果樹栽培を主力にしている。新村では南新（23戸）、東新（10戸）が多い。どちらも水稻を主力としながら、野菜生産も盛んである。

## VI-2 奈良井川左岸 その3.

### 農業の担い手の多い今井村

奈良井川左岸の最後に、今井村をみる。

先に結論をいえば、今井村は、相対的絶対的に最も多くの人々が農業に従事している村である。今井村には14の集落がある。うち、65才未満の男子専従者のいる農家の比率が20%以上30%未満という集落は三つ（堂村、下新田、北耕地）、また10%以上20%未満の集落は九つ（上新田、中村、中沢、東耕地、西耕地、野口、古池、西原開拓、北今井）を数える。そして、奈良井川左岸の、今井村以外の五か村で圧倒的に多かった、10%未満は、今井村ではわずかに二集落（境新田、南耕地）のみである。ちなみに、今井村の農家総数は544戸である。その内、50戸には、あとつぎ農業専従者がいる。これに対し、笹賀村の総農家数510戸については、あとつぎのいる農家9戸、同様にして新村の総農家数381戸についてあとつぎのいるのが10戸という数値と較べても、今井村の特異性がわかる。

市街地化との競合が限られ、農業経営を大きな規模で自主的主体的に展開できた、奈良井川左岸を、島内村から今井村までみてきた。集落カードを吟味した限りでは、水稻作が主位で、農家の比率の、水稻への偏りが大きい集落では、一様に働き手が少ないか、高齢化が進んでいるようである。おそらく「土日百姓」が、定着している農作業の形態なのであろう。水稻作の省力化が、若年者や壮年者の農外就業をいっそう促し、農業専従者の高齢化を結果したものと思われる。これと対照的に、稲への依存が小さく、果樹、施設園芸、野菜栽培に主力をおいてきた集落では、相対的にはあるが、働き手が多く、その年齢も高齢化していないといえる。

## VI-3 奈良井川右岸 その1.

### 市街地に近いが依然農業も続ける寿、岡田、本郷の三か村

牛伏寺川の作った扇状地の上の、寿村は、南部の小赤、北部の白瀬淵、中間の豊丘の三つの部分に分かれる。まん中の豊丘は新産業都市建設事業の一つである大型の住宅団地が造成され、大きく変化した（地形図参照）。南部の小赤と北部の白瀬淵には、まだ農地が広く残っている。水稻を主位作物とする集落ばかりの寿村にあって、白瀬淵の上瀬黒集落のみが果樹（ブドウ）を主位作物としている。水田の圃場整備は寿村の北部から順に南に向かってす

すみ、いちばん北の下瀬黒集落には、基幹となる65才未満の男子がいない。そのほかの集落はすべて、65才未満の男子専従者は、農業従事者総数の10%以下である。

寿台の住宅団地を牛伏川に沿い北へ少し下ると正面に望む中山丘陵の南斜面に広いブドウ畑がひろがる。果樹栽培に従う上瀬黒の人々も、働き手の事情はほかの集落とほぼ同じで、69戸の農家中、60才未満男子専従者のある農家は6戸だが、あつぎは1戸である。60才未満男子専従者のいる農家数を集落別にみると、赤木15戸、白川10戸、百瀬7戸などが他より多い。これらの集落の、主位作物は稲だが、それについて果樹販売額の大きな農家が多い。白川集落には3戸、あつぎのいる農家がある。白川には寿台の住宅地化から外れた畑地が広く残り、かつて水利に恵まれず、養蚕から脱却してリンゴやブドウ栽培に生き残りをかけてきた。

岡田村は市街地の北部の縁に接して、ゆるやかにではあるが、市街地の蚕食を受けている。寿村よりもさらに水田の圃場整備は遅れていたが、それは、かえって、塩倉や神沢ではリンゴ栽培に、井深西ではセルリなど野菜栽培に、早くから努力を集中してきたためと思われる。働き手の事情は、野菜（セルリ）栽培の核心地伊深西と、リンゴに力を入れている神沢では、65才未満の男子専従者が10%以上20%未満であり、この2集落を除いたほかの集落は、みな、65才未満の男子専従者が10%未満となっている。ちなみに、60才未満の男子専従者のいる農家は、伊深西集落で11戸、神沢集落で17戸である。

本郷村も、地形や市街地との位置関係では岡田村と似ている。水稻とならんで果樹、野菜が栽培され、特に女鳥羽川上流の三才山集落や稲倉集落では野菜に力が入れられてきた。この村の南部の大村や惣社は市街地化の顕著な集落だが、ここはまた、地形が平坦で連続して広く、農地には最適である。農家の所有する信州大学の教職員や学生の貸家やアパート類が多いのも本郷村のもう一つの特徴である。その中で、市街地化の影響を直接には受けない、丘陵上の洞集落にだけ、あつぎのいる農家が2戸みられる。

寿、本郷、岡田の三か村に共通するのは、野菜や果樹に力を入れてきた集落では、水稻に農業収入の主力のあった集落よりも、いくらか（いくらか、という程度にすぎないが）担い手に余裕があるようにみえることである。そのような集落でも、圃場の整備がすすみ、水稻栽培で省力化が可能になれば、市街地に近い集落ほど、基幹労働力の農外就業が増え、農業就業者の女性化と、高齢化がすすんでいく。

### VI-3 奈良井川右岸 その2.

市街地に吞まれる里山辺村、通勤圏にくみこまれる入山辺村、中山村

薄川に沿う、入山辺村、里山辺村、中山村の三か村について検討してみる。農業の担い手の点で、三か村は共通しているからである。

90年センサスでは、入山辺村は21集落、農家総数450戸、里山辺村は13集落、農家総数464戸を、それぞれ擁する。入山辺には、農業専従者が女子だけの集落が五つ（包石、寺所、駒越、一ノ海、牛立）、同様里山辺には三つ（新井、西荒町、大崇崎）ある。入山辺のいずれの集落も、背後に急斜面の山地があり、耕地が狭く、薄川の谷底で幹線道路に接し、通勤交通の便はよい。里山辺の三集落はみな広がってきた市街地の縁辺部に位置している。

入山辺村の集落の半分を越す、12の集落では、65才未満の男子専従者が農業従事者の10%以下である。また、その比率が10%以上20%未満の集落は二つ（上手町、原）だけである。この2集落は、標高こそ800mを越して高いが、南面する広い緩斜面を活用、果樹を主位作物としている。また、高原野菜栽培の核心地の三城集落だけは、この比率が30%以上40%未満である。60才未満の男子専従者がいる農家数を集落別にみると、原に6戸、大和合に5戸、三城、西桐原、東桐原に4戸ずつである。その集落の順に主位作物を記せば、果樹、野菜、野菜、果樹、果樹、となる。あとつぎのいる農家は、農家総数450戸に対してわずか2戸（舟付と三城に一つずつ）と実に少ない。

里山辺村でも、13集落中、9集落は、65才未満の男子専従者の率が10%をきる。薄川左岸の南小松集落だけはこの比率が10%以上20%未満である。里山辺村では、この9集落が、今のところ、市街地化が遅れている。60才未満の男子専従者のいる農家数は、上金井、薄町が7戸ずつで共に主位作物は果樹、北小松と南小松が4戸ずつである。

果樹（ブドウ）を主位作物とする集落の、あとつぎについてみよう。主位作物を農家の全部が栽培しているわけではないが、おおまかな傾向はつかめる。入山辺村では、該当集落は13あり、ふくまれる農家は339戸である。跡継ぎがあるのはこのうち、1戸だけである。里山辺村では、さきの該当集落は7、ふくまれる農家は250戸である。この中で、あとつぎのいるのは2戸だけである。これらの様相は、A型の並柳集落のそれとほぼ同一とみてよく、逆に、後述の今井村とはかなり違っている。

中山村では千石第二集落が65才未満の男子労働力が従事者数の20%以上30%未満で、入山辺村の三城集落（30%以上40%以下）に似ている。両集落とも今次大戦後開拓地として発足、辛酸をなめながら高原野菜の栽培に活路を見いだしてきた。中山村の他の集落ではすべて、65才未満の男子専従者の率が農業従事者の10%をきっている。60才未満の男子専従者のいる農家数は、埴原北集落6戸、和泉と埴原西集落が5戸ずつだが、3集落ともあとつぎは1戸ずつである。千石第二集落の農家数は16戸、60才未満の男子専従者のいる農家は4戸だが、うちあとつぎのいるのは3戸である。

市街地に近く、交通の便があり、通勤が容易にできる、あるいはもう市街地に耕地が吞まれている、といった状態の、入山辺村と里山辺村では、果樹や野菜のような集約的な農業が営まれつつも、その継続は困難になってきている。入山辺村同様、中山村も、千石第二を除く集落では農外就業すなわち通勤による兼業化が進行している。東山山麓線の整備につれ、中山村でも水田の圃場整備が大規模に実施されているが、稲作の省力化は兼業増加に拍車をかけよう。

農業では、その存続を、農業自体ではかっていく努力もむろん大切だが、農外就業の機会が間近かで得られたり、土地利用変化の圧力が強かったりすれば、農業の力だけの対抗は不可能であろう。

## Ⅶ. 里山辺村と今井村、果樹作地の典型例の比較

最後に、共に稲作への依存が小さく、果樹作が盛んでありながら、農業の担い手という点では対照的である、里山辺村と今井村とを、集落カードにより比較してみよう。

集落の数は、里山辺村が13、今井村が14である。農家総数は、里山辺村464戸、今井村544戸である。両村の位置は、松本市の市街地の中心を市役所とすると、里山辺村（支所）まで、2.5kmに対し、今井村支所までは10m、4倍の隔たりである。里山辺村は市街地の東部に接し、広がる市街地にすでに一部が吞まれているが、今井村はそうした状態ではなく、この点が大きく違う。

データの、男子農業専従者のいる農家数の、[051]と[052]について二つの村を較べると、男子農業専従者が一人の農家は、里山辺村95戸、今井村253戸である。男子農業専従者が二人以上いるものも加えると、里山辺村101戸、今井村328戸になる。総農家数に対して、里山辺村では、農業専従者は、4戸に1戸という状態だが、今井村では、6割の農家に男子専従者がいる。農家の最大の関心事であるあとつぎは、里山辺村では5戸なのに、今井村は50戸である。60才未満男子専従者の有無では、里山辺村が30戸だけなのに、今井村は201戸を数える。ここで注意したいのは、里山辺村の、男子農業専従者のいる農家総数が101戸であったのに、60才未満男子専従者のいる農家が30戸にとどまることである。同じことは今井村では、有男子専従者農家総数328戸に対し、有60才未満男子専従者農家数が201戸である。里山辺村では、60才以下の専従者のいる農家が、101戸中30戸しかなく、したがって高齢化がかなり進んでいる。しかし今井村では、その逆で、328戸に対し201戸、およそ三分の二の農家に、60才未満の男子専従者がいるのである。

働き手あるいはあとつぎがないといっても、同じように果樹作をしながら、里山辺村と今井村の差異は、かくも大きい。その違いを左右するものが、市街地化の進行の有無、そこからくる土地利用の競合の有無であるのは繰り返しふれてきた。たとえば、貸家やアパートの類は里山辺村では至る所で目にするが、今井村にはない。農業の担い手の面でも両者は異なり、市街地に近い里山辺村では、今井村よりも通勤がはるかに容易である。

## VIII. 農業の担い手に関するまとめと要約

松本市の場合、農業の担い手の状況の如何は、次の三つに整理できる。

一、集落のあるのはどんな場所か。すなわち、土地条件、地形や水利条件はどうかという点と、市街地に対する位置という点である。前者には平坦地に乏しく耕地を拡大できなかった所と、逆に平坦地が広く乾田化・機械化で稲作省力化を実現した所がある。どちらでも通勤兼業が速やかに増えた。また、後者では市街化の圧力の強弱いかんで、集約的な施設園芸がどうにか成り立つ場合もあるが、強い圧力のもとでは存続は困難である。

二、農業経営がどのようなあり方か。主力が元来水稻作だった所は、基盤整備と省力化が農外就業の増加となったが、島立村や新村の一部のように専業農家を続けるため稲作に施設園芸が加わった所もあり、専業農家の請負耕作もある。

いっぽう和田、今井では農業が担い手を減らさず近代化、集約化をとげた。その背後に、畑作経営の大規模化と水利開発などの基盤整備があり、稲作の基盤整備とは趣を異にした。これには養豚、乳牛の集団化も含まれ、果樹も基盤整備に支えられたが、これら稲作外の部門が相応に発展できたのは、市街地化の圧力がなかったためでもある。

三、周囲を市街地に包囲された地域でも、旧松本村のハウスの菊栽培など、それなりに労力

表一 6-3 里山辺村 B型 農家の労働力保有状況（専従者、あとつぎ等）

集 落 名	主位	総農家数	[051]	[052]	[053]	[055]	[056]
下 金 井	07	29	8	0	0	0	3
新 井	07	28	2	0	0	0	1
湯ノ原	07	33	4	0	0	0	0
藤 井	01	47	7	1	1	1	2
上 金 井	07	64	19	2	1	7	4
薄 町	07	69	16	2	0	7	4
兎 川 寺	07	18	3	0	1	3	3
荒 町	01	16	3	0	0	1	1
西 荒 町	07	9	0	0	0	0	1
北 小 松	01	48	11	1	1	4	1
南 小 松	01	15	7	0	1	4	1
林	01	71	10	0	0	3	7
大 嵩 崎	01	17	5	0	0	0	4
計		464	95	6	5	30	34

[ ] の数字説明 051 男子農業専従者が一人の農家戸数  
 052 " 二人以上の農家戸数  
 053 男子あとつぎ専従者のいる農家戸数  
 055 60才未満男子専従者のいる農家戸数  
 056 農業専従者が女子だけの農家戸数

主位は主位作物、01は水稻、07は果樹

表一 6-4 今井村 D型 農家の労働力保有状況（専従者、あとつぎ等）

集 落 名	主位	総農家数	[051]	[052]	[053]	[055]	[056]
上 新 田	07	95	46	13	11	36	13
堂 村	06	42	23	11	6	26	3
中 村	07	22	9	2	2	6	1
中 沢	07	28	12	2	1	9	5
下 新 田	07	40	16	8	6	15	4
境 新 田	07	42	19	1	1	7	6
東 耕 地	07	45	26	7	7	21	4
南 耕 地	07	44	7	5	2	10	3
西 耕 地	07	69	35	5	5	23	7
北 耕 地	07	56	27	13	6	29	5
野 口	06	17	9	2	1	3	2
古 池	07	22	9	4	2	9	2
西原開拓	06	13	10	1	0	5	2
北 今 井	01	9	5	1	0	2	0
計		544	253	75	50	201	57

[ ] の数字説明 051 男子農業専従者が一人の農家戸数  
 052 " 二人以上の農家戸数  
 053 男子あとつぎ専従者のいる農家戸数  
 055 60才未満男子専従者のいる農家戸数  
 056 農業専従者が女子だけの農家戸数

主位は主位作物、01は水稻、06は野菜、07は果樹



を集中して根強く存続するものもある。しかし並柳の例からは、将来に期待するのは無理であろう。

こうして、後継者難の要因はいろいろあるし、原因が農業だけに求められないのはいうまでもない。

松本市の農業で、まがりなりにも後継者が確保できているのは、市街地膨張の直接の影響を被ることなく、しかも農業との取り組みが、地域ぐるみで行われ、その時々にもっともふさわしい農業を選択する努力が払われ、それが歴史的に蓄積されてきた所（旧村では今井村、集落では並柳が例）であった。地域住民の自主性にゆだねられたところ大なわけで、ここにも農家の意欲や「価値」追求がうかがえる（今井地区誌編さん委員会，1990）。

本研究では、主位作物への依存の程度、経営と作物の構成、担い手と年齢構成などの単純化した指標と、景観とを組み合わせ、市農業の全体像を描こうと試みた。景観描写と集落カードの一部の資料により、市全体をながめるという作業を反復することに努めた。地域区分の精緻化が今後の研究課題である。1997年の現時点では、1995年調査の集落カードが最新の情報である。しかし、1990年の農業の姿は、GATT 合意直前であり、それ自体が記録されてしかるべきであろう。また、筆者の、集落カードを地域区分に用いた初めての試みであり、了解を得たい。冒頭に紹介した小林論文に、筆者は目を開かれた思いである。味がよく、農薬の害のない、レンゲ米や田鯉米その他様々の試みは、農家の人々にも「価値ある」ものであり、同様「価値ある」施設園芸と並存して景観を構成している。意志や意欲も景観を作るのである。それと共に、松本市の農業は広い松本盆地の南部に位置し、構造改善や中信平開発事業をはじめ、国・県の大規模な基盤整備の投資を受け、県や市の農政では戦後一貫して近代的経営を確立する戦略目標であった。同時に県下第二の規模の都市の市街地膨張もまともに受け、土地利用の競合や通勤兼業の影響も強く、都市近郊の集約的経営の中には、市街地化の圧力に抵抗しきれなかったものもあった。それでも、農家の人々の努力をいつも心にとめたいと思う。あわせて、農業の課題が何かも考え続けたい。

## 注

### 1) 「農家」の定義（農林水産省統計情報部による）

農家とは、農林業センサス調査期日（2月1日現在）の経営耕地面積が10a以上または10a未満でも調査期日前1年間に農産物販売額金額が次の金額以上あった農家をいう。

1965年 3万円 70年 5万円 75年 7万円 80年と85年 10万円 90年と95年 15万円

## 文献と資料

- 長野県開拓二十年史編集委員会（1966）『開拓二十年史』開拓二十周年記念事業実行委員会  
 松本平農協二十年史編さん委員会（1985）『松本平農協二十年史』松本平農業協同組合  
 市川正夫（1991）「カーネーションの生産卓越地の動向—長野県坂城町，上山田町，富士見町，松本市，佐久町一」『信濃』43-8，pp. 42-54  
 財団法人農林統計協会（1991）「1990年世界農林業センサス農業集落カード長野県 松本市（フロッピーデ



ィスク)」

松本市並柳農家組合50周年記念誌編集委員会編（1994）『並柳農業50年のあゆみ』松本市並柳農家組合連合会

小林経廣（1995）「稲作に伴う複合生産を営む施設園芸—松本市島立・新村・和田の専業農家の生産形態—」『信濃』48-1, pp. 1-18

JA 松本ハイランド入山辺果樹部会・編集兼発行（1996）『山辺ぶどう史誌』

松本市農政部農政課（1997）『松本市農政概要 平成8年版』

今井地区誌編さん会（1990）『今井地区誌』 同会

## SUMMARY

### **An Attempt to make clear Spatial Structure and its Landscapes of the Agricultural Production in the Matsumoto City Area, Central Highland Japan**

**Takahiko YOSHIDA**

Containing the Matsumoto City Area, the Matsumoto Basin lies on the Honshu's inland central portion and is nestled within high mountainous areas such as Hida Mountains on the western side and Utsukushi Highlands on the eastern side. Its altitude is approximately from 600 to 700 meters above sea level and have a characteristic inland climate.

Concerning landforms, this area is composed of alluvial lowland and diluvial upland sections. The former occupies central portion of the Matsumoto Basin and are mostly devoted to rice cultivation. The latter, diluvial upland terraces occupies and extends surrounding the outer portion of the central alluvial lowland, especially in the western and southern sections. The lowland and the upland areas are divided by the fan margins formed on the upper river stream sides of the lowland area.

On the upland terraces several field crops such as fruits and vegetables suited species for cool upland climates having relative small rainfall and high summer temperatures are prosperously cultivated.

In 1964, Matsumoto City was designated as the New Industrial City and during the Industrial High Rate Growth Era, manufacturings primarily based on precision machines and electronics parts making sectors remarkably expanded.

Since then industrialization and urbanization have created numerous employment opportunities which have attracted not only the young but many farmers as well. The majority of farmers is currently employed in other occupations, and the percentage of part time farmers, therefore, high.

During 1970s and 80s large scale land reclamation have been fostered with state and municipal government financial supports and resulted in completion effective irrigation systems and arrangement of regularly plotted farmland with large tracts suitable for machine working. Based on such land reclamations, excellent labour saving technologies are developed and established in rice cultivation sector specially. Those had accelerated to increase the number of farmers who were called "holiday farmers", commuting and engaged in nonagricultural works in urban areas in the week days and work in their farm only holidays.